MeSH subheadings list の

辞書体編成の試み

A Trial Compilation of the Dictionary List of MeSH subheadings

京都大学医学図書館

小 川 晋 平*

I はじめに

現在、京大医学図書館において、IMを使用しての利用者サービスとしては「書誌事項の確認」の範囲で行なわれているぐらいなもので、組織として一医学図書館における業務として一直接的な特定主題に関する文献検索サービスは行なわれていません。

行なえない理由として、先例も問題点として、第一にあげている人員の問題—担当者の数の問題—でしょう。すなわち、文献検索サービスは、機械検索でない場合、人海戦術によらなければ、『IM到着から二週間、係員が占有』することになり、『コピーのための作業が実動5~6時間かかる』ことに対する処理ができかねることにあり、国立大学に対する相つぐ定員削減、予算不足のもと、担当者を配置することが困難な状態にあること、第二の問題として、係員の医学知識が問題となってくる本学のように、総合大学においては、その良し悪しはともかく、配置転換にともない新旧交代がしばしば行なわれており、館員の専門知識が蓄積されにくい状態にある。『IMの検索作業で最も重要な点に MeSH による件名の決定』が不十分になる可能性が高いといわざるを得ない。

ところで、利用者はどこで習われるのか、側で見ていると、IMを使って必要な文献を検索しているようである。又、一方、カウンターへ、“IMの利用法”について(年間10件は下らないであろう)質問がよせられる。当番だった係員は、大なり小なり悪戦苦闘、あたかも鐘撞のごとく、右手には“MeSH”，左手に“IMの使い方”をふりかざし応答している。利用者には、それであ

りとか理解が得られているようである。

さらに、利用者が必要とする“具体的主題”を提示した場合、MeSHの決定は利用者まかせになり、側からながめているだけである。この時ほど専門知識のなさを痛感する時はない。ただ MeSH の構成について口をはさむだけである。

しかしながら、反面、MeSHの決定は利用者との対面応答によってなされるべきであるという命題がひきだされるのではないだろうか。

MeSHが決定されると、より検索区分を少なくするため sub heading を見つけることになるが、日常的に“sub headings list”に接する機会の少ない私達にとっては、やはり四苦八苦することになる。

MeSH で一度、sub heading で二度の、長い時間を必要とするわけであるが、MeSH 決定は利用者との対面応答によるとしても、sub heading 決定は館員が指定できないものかと考えたのが、今回の“sub headings のカード化”の発想の第一歩でした。

II 具体的作業について

i) まず“IMの使い方”附録 副標目の使用概念(1971年版 MeSHによる)そのものを、目録カードに転記することにした。(図-1)

苦勞のわりには、むくいられるものは少なく、むしろ読みずらさが増しただけで、sub heading 全体の見当がつかなければ、けっきょく最初のカードから最後のカードまで見なければならぬこととなり、当然そうなるべくして、ほとんどメリットは生まれてくるはずがなかった。

ii) 第一の発想に基づき、再度整理を行なうと、

*Shinpei OGAWA : Kyoto University Medical Library

図-1

Sub headings使用概念のカード化

①日常的に MeSH を使用しない誰もが、sub heading については決定できることが前提としてあり、② sub headings list を通覧するより早く捜し出せること、少なくともこの二点に関して満足 of いくものでなければならないことである。

①については、sub headings の使用概念和訳の方から sub heading が検索できることとし、とりあえず和訳を適当なところで分割することにより、検索キーを増やすこととし、又、同時に和訳文章の範囲を脱しないこととする。

②については、当初の発想どおり、やはりカード化とすることにした。

iii) ①に関する具体的作業として、副標目、使用概念和訳の文章中、くり返し使用される単語(例えば、疾患、薬物等)(表-1)、又、検索上必要と思われる単語(例えば、看護法、レントゲン検査等)で分割し、②のカード化は、目録カードを用いて転記した。(図-2)

iv) 配列に関しては、i) で作成した sub heading cards を最前列に sub heading のアルファベティカル

に配列し、“見出し山カード”『sub heading → 使用概念』をつけた。

つづいて“見出し山カード”『使用概念→sub heading』を加え、iii) で作成した、cards をローマナイズ(ヘボン式)し、アルファベティカルに配列し、さらに『器官…』、『疾患…』、『薬物…』、という、小見出しを、それぞれの前列に“見出し山カード”として配列した。

これで cards の合計は170枚となった。

v) 以上作成した cards の検索方法を実例に基づきふれてみると、

『Idiopathic Cardiomyopathy に関する論文で、その統計がでている、最近2～3年間のものを求めている…』

という、質問であるが、以下会話的に追ってみると……

①MeSH の決定

MeSH の決定は、先にふれたごとく、対面応答で決定しました。

『Idiopathic Cardiomyopathy とは』

『自然発生した、心筋症のこと』

図-2 その1

“Sub headings→使用概念”カード

“使用概念→Sub headings”基本カード

……Cardiomyopathy で MeSH にあたるが、MeSH には件名としてとり入れられていない。

……医学辞典で、心筋症=Myocardiaであることを調べて、

「同意語として、Myocardia でもよろしいですか…」

『結構です…』

……Myocardial Disease で MeSH にあたると、

- Myocardial Disease, Primary.
- Myocardial Disease, Secondary.

が件名としてとりあげられていた。

「自然発生した心筋症ということだから、Secondary の方の関係ないものと考えて…」

『たぶん、Primary だけで充分…』

ということになり、MeSH は、

Myocardial Disease, Primary.

と決定した。

②sub heading の決定,

やみくもに検索するのではなく、一度整理をする必要がある。整理というより『自然発生した心筋症の統計』から、sub heading となりうる言葉を連想していく作業が必要であり、

- 「統計」
- 「疾患の統計」
- 「罹患率」
- 「分類」
- 「疾患の分類」

以上のような、連想のもと、cards を検索したところ、『分類、

特定の学問や専門分野の分類。

→Classification (B, C, D, F, G, H, I, N)』

『疾患の統計の数値などを表す。

→Occurrence (C, F.)』

が得られ、再び “sub heading→使用概念” のそれぞれ Classification, Occurrence の cards の使用概念の全文にあたり、sub heading として、“Classification” “Occurrence” を採用した。

③文献検索の結果,

ちなみに、IM '74年, '75年, 2年間分について検索してみると、

Myocardial Disease, Primary.

Classification. 30文献

Occurrence. 21文献

が検索された文献数であったが、利用者が論題によって実際に入用とした文献は、“Classification” の30文献であった。

Ⅲ ま と め

以上の、今回の sub headings list の cards 編成の試みを行ないました結果と、今後の方向について、最後に若干まとめておきますと、

まず、試みの問題点をあげますならば、

第一に、cards は、あくまで“個人的、覚え書き(メモ)”の範囲を脱しきれなかったことです。作成当人には便利なメモではありますが、他人の使用にはたえられないものであったことです。すなわち、検索キーが一定の法則性をもつことなしに、適当な所で、副標目、使用概念和訳を分割したことに由来するようです。

第二に、第一の問題点ともかかわりますが、検索キーが少なく、時として役に立たないことです。これは今回

図-2 その2

図一 2 その 3

“使用概念→Sub headings”
カードの配列例

のカード化を、使用概念和訳の範囲を脱しないこととした以上、やむをえなかったことですが、実務上検索できる cards (検索キー) の少なさは不便を感じさせていることです。

第三としては、相互参照カード (…see card) を作成しなかったことです。例えば診断と治療という二つの単語に関しては、使用概念和訳の中にもある、診療という単語に一本化することも可能となりはしないかということです。

第四として、これは今回の試みそのものにかかわる問題として、“使用概念→sub heading” cards の必要性ですが、MeSH を決定し、直接 IM にあたり、使用されている sub headings を検討した方が時間的にも、また検索の正確性も良いのではないかということです。

以上、簡単ですが問題点をあげましたが、今後どのように展開していくかについては、第四の問題点に関しては先にのべましたように、IM の配架位置からはなれた出納カウンターでの、『IM の使い方』に関する質問に対応できるような、一つの導具を作成していく必要性はそれでも強く感じているし、またあるべきだと考えています。その前提のもとで、第一から第三の問題点に関しては、今一度方針を練り直し、現カードを維持しつつより検索しやすいものを作成することと、同時に、実際例にふれるなかで不都合な部分の改善をはかることであると一抽象的ですが一考えております。

Ⅳ お わ り に

今回の“sub headings list の辞書体編成の試みは、もちろん日常業務として、MeSH sub headings に接する機会の多い人々にとっては、無用の長物、あるいはそれにちかいものでしょうが、接する機会は少なくとも MeSH はともかく sub heading の決定はすみやかに行なえる、そんな夢をいだき、辞書体編成にもおよびもつかなかった“試行”ですが、この試みをまとめるにあたって、当館館員の皆様に、御指導・助言、あるいは叱咤・激励をいただきましたことをこの紙面をおかりして、お礼申し上げます。

表一 1 “IM の使い方” 1971 年 附録 副標目の使用概念に使用された回数 (上位 8 位まで)

疾 患	24 (回)
診 療	18
器 官	16
薬 物	13
組 織	12
動 物	9
微 生 物	7
生 体	6

(診断, 治療を含めた)

(sub headings は, 60)

参 考 文 献

- 1) 松村多美子: Index Medicus の使い方. 日本医学図書館協会 1971.
- 2) 殿崎正明: レファレンス・ワーク —developing library の場合—. 医学図書館 17(1/2): 49—54, 1970.
- 3) 佐藤和子, 吉川博子: レファレンス・ワーク実務—Index Medicus サービス—. 医学図書館 17(1/2): 23—25, 1970.
- 4) 津田良成: 医学図書館に於ける文献情報サービスとその限界. Library Science No.4: 63—88, 1966.
- 5) 米沢彰, 奥井紀美子: Index Medicus を情報源とする SDI サービス —東北大学医学図書館の場合—. 医学図書館 18(3): 233—238, 1971.

(昭和52年8月5日受付)